る。演者が勤務終了半年以降の検診を倫理的配慮として行った。
症例：83歳、女性、不安障害。以前より実地医療として近医である対象病院に断続的に通院していた。ここが悪いのではないかと心配になって受診を行い、大丈夫と診断されると安心して社会生活を営んでいた。受診行動が徐々に回復となり、X-2年頃から精神的な患者と認識されていた。さらに受診回数が頻回となり（月22回以上）、毎日救急外来に受診が続き、救急外来看護師より悲鳴が上がったり、X年患者が介入することとなった。介入後も状況は改善せず、老人保健施設などの援助も検討された。午前中の指示的受診指導と親族家族全体での問題共有、信頼関係が複雑化され、徐々に軽快し認容可能な受診行動に至った。

10．当院における集団療法の現状と効果（第1報）
PSRストレス医学研究所1 吉祥寺通り花岡クリニック2
○花岡 啓子12 花岡 芳雄12
目的：当院では主に交流分析理論に基づいた集団療法を実施しているが、患者の自己理解と治療への主体的な関与を促すうえで有用と考えられるので、その現状を報告し臨床的効果について考察した。方法：患者の任意参加による集団療法で、1回60分、月に3回程度開催している。

症例：57歳、男性、X-3年から多彩な身体症状と抑うつが生じ、複数の医療機関を受診。アルコール性神経障害およびうつ病と診断されたが、患者は自覚以外の診断を受け入れず治療を自己中断した。当科入院にて再度精査を行い、うつ状態を伴うアルコール性神経障害と診断、一般心理療法を取り入れながらアルコール性神経障害と抑うつを切り離して患者にフィードバックしたところ、患者はアルコール性神経障害を身体症状の原因として理解し治療に協力的となった。

11．難治性喘息として長期加療を受けていたfactitious asthmaの1例
横浜労災病院心療内科
○木村 将貴 竹村 百代 富田裕一郎
津久井 要 松波 聖治 山本 晴義
衛藤 真子 吉村佳世子 秋庭 篤代
江花 昭一
多くの難治性気管支喘息では、心理的要因が関与するが、hyperventilation syndromeなど、他の病態の合併が認められる場合がある。
今回われわれは、内科的薬物治療がまったく奏効せず、結局vocal cord dysfunctionと診断し、行動療法的アプローチによって早急に改善した症例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。